知的生きかた文庫

愛のパンセ

●自分にひそむ無限に学ぶ

谷川俊太郎

三笠書房

谷川俊太郎（たにかわ・しゅんたろう）
一九三一年一二月一五日東京生。肉声の魅力によって現代詩に独自の領域をきりひらいた。八三年詩集『日々の地図』で読売文学賞を受賞。詩集『二十億光年の孤独』『定義』『手紙』他。子どものための詩の本としては『ことばあそびうた』『わらべうた』など。その他、翻訳、戯曲、作詞など幅広い領域で活躍。

た 10-1

知的生きかた文庫
愛のパンセ
著　者　谷川俊太郎
発行者　押鐘冨士雄
発行所　株式会社三笠書房
郵便番号一二三
東京都文京区後楽二-二三-七
電話〇三-八一四-一一六一〈代表〉
振替東京三-二三〇九六
印刷　誠宏印刷
製本　宮田製本
© Shuntaro Tanikawa
Printed in Japan
ISBN4-8379-0108-5 C0195
定価・発行日はカバーに表示してあります。

知的生きかた文庫

愛のパンセ

谷川俊太郎

三笠書房

目次

愛のパンセ

美しき惑いの年 8
贈物 15
失恋とは恋を失うことではない 17
夏の夜の夢 24
うそだうそだうそなんだ 28
青年という獣 33
恋する二人にタブーはない 39
数える 42
二つの恋文 45
泣く 50
女*果てしなき夢 53

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

窓 61
愛をめぐるメモ 64
ただそれだけの唄 71
恋の中の音楽*その二・三の形 74
沈黙のまわり 81
ベートーヴェン 87
詩人の春 100
散歩 103
山小屋だより 108
谷川俊太郎に会う 113
私の部屋 120
あふれるもの 126
愛*私の渇き 136
大きな栗の木 152
アダムとイヴの対話 164
はいといいえの戯れ

ほんとのうそとうそのほんと 196
日本語のおけいこ 190
或る夏の夕ぐれに 184
決意する時 178
エピローグ 171

男と女

ボーイフレンドの全くないA子さんへ 204
ボーイフレンドのありすぎるB子さんへ 209
女であることに自信をもってください 213
男を理解しないでください 216
男のうそは女のほんとにまさる 220
男のえがく理想的男性像 224
男は優しさをもとめています 229
結婚前に男の考えること 233
恋愛論は役に立つか 243
男と女 247

若さの純粋 280
愛の中の孤独・死 273
愛するよろこび 268
家庭のイメージ 263
あいまいなままに 258

あとがき 285

愛のパンセ

美しき惑いの年

人生そのものへの惑い

夕暮、子供たちは釣竿をかついだり、蟬とりの長いもち竿をふり廻したり、笑いながら、駈けながら、うちに帰ってゆきます。彼等の後には美しい夕焼があるが、彼等はそんなものを見むきもしない、やがて温い御飯が彼等を待っている。旺盛な食慾でそれを平げると、子供たちは何にも気づかずに一日の眠りにつきます。そうしてもう一度朝、子供たちは朝だということを意識もせずにとび出してゆきます。そういう子供たちがふとうらやましくなるようなことがありませんか。

人生を（人生という言葉はそれだけでもうどこか詠歎的な響きをもっていて、僕は好かないのですが）とにかく人生を人生というような形で意識すること、それがもはや惑いの始めではないでしょうか。ほんの些細なことが僕等を人生に気づかせるようになります。それも多くの場合先ず僕等は不幸せに気づいてしまうのです。不安が具体的な形でやってくるうちはまだいい。しかし人生についてのもっと漠然とした不安の感じ、それはいやされることの

ない渇きのように僕等を苦しめるようになります。一人っ子でありまた大変な母親っ子であった僕は幼い頃よく母の死の幻想におびやかされました。ものごころつかぬうちの僕は、ただ母の帰りの遅いのを心配して、壁の方を向いて泣いていればよかったのです。しかしやがて僕は、もっと大きくもっととらえ所のない不安にとりつかれるようになってしまいます。この世で僕は、何に頼ることが出来るのか。どんなに愛するものも不死ではない。この世で結局僕はひとりぼっちではないのか。その自分自身もやがて死んで無に帰ってしまう。ではこの世で僕が生きるとは一体どういうことなのだろう。それが僕の惑いの始まりでした。

あこがれ

遠い山脈は紫色にかすんでいる。その上に大きな積乱雲が烈しく湧き出ています。太陽は輝き、空はあくまで青い。時折ふと風が立って楡の木の葉をひるがえし、汗ばんだ僕の腕を撫でてゆきます。すべてが生の喜びに満ちあふれた真昼……しかしその時にも僕は決して本当に満ち足りてはいないのです。あの遠い山々を越えてゆけば出会えるのではないか。この僕をもっと隅から隅まで満ちあふれさせてくれるものに。どんな小さな不安をも残さずに僕を迎えてくれる故郷があの山々の向こうにあるのではないか。しかし同時にまた僕はそんな夢がすべて空しいものであることを知っています。あの山々を越えて行ってもまた此処と同じ野があるばかりだ、それをどこまで歩いて行っても海に出会うばかりだ。そして海を超え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たりしても、そこにはまた別の国があり、しかも同じような野や山や都があるばかりだ。そういうことを知りながらも何故僕はあこがれてしまうのでしょうか。恐らく僕には何か不足しているものがあるのだ。

青春とは過剰なもののように見えて、実はそれは不足の補償にすぎないのではないか、時折そう思うことがあります。青春においてこそ僕等は最も飢え渇くのではないでしょうか。そして僕等は自分が本当は一体何に飢えているのかも解らずに苦しみます。僕等が浪費するのは僕等が過剰なものをもっているからではなくて、むしろ僕等は浪費することで不足しているものを手に入れようとしている、それは一種の体を張った投資なのではないでしょうか。では若い僕等には一体何が不足しているのか。それを一口で云うことは出来ません。しかし僕は少くとも次のような自分の経験をお話しすることは出来ます。

先程書いたようなある夏の真昼、僕は腕や顔を太陽の焼くにまかせて野原に寝転っていました。僕はその時殆ど完全にと云っていい程満ち足りていました。今のこの喜び、今、此処のこの陽の輝き、草の匂い、やさしい風、そういうものだけで僕は十分でした。ところがふと突然全くいわれのない或る唐突な感情、それは一種の後めたさでもあり、また劣等感でもあり、鋭いさびしさのようなものでもありましたが、そういう感情に僕は襲われた。僕はその時、自分がひとりであるのに気づいたのです。僕が男としてひとりであり、そのため僕の存在がこの調和した世界の中である種の不調和であるように感じたのです。僕のまわりで、

草たちは育ち、蜂は花々の間を飛びまわっていました。彼等こそ本当に生きているのです。ところが僕は――僕もたしかに生きている、しかしそれは本当に世界に与れる生き方ではないのではないか、僕の生き方にはまだ或る不確かさ、地についていない架空の感じがある。そして僕はその時はっきり気づいたのです。世界の生命の流れに。それは草や蜂や花々などの生物と同じく、山や雲や土などの無生物までをも含めた大きな大きな流れなのだ。そしてその中では僕はひとりだけでは決して全いものになれない。僕はひとりではその流れに与ることは出来ないと僕は気づいたのです。

僕等は人間です。だから僕等は人間であることによって、世界の大きな流れに与らねばならない。人間であることは、人間の社会の中においてだけ人間であればいいのではない。僕等は人間の社会を超えたものにいつも気づいていなければならないのではないでしょうか。そしてそれに気づいている時、性は始めてその本当の大きな意味を明らかにします。

美しいもの

異性という言葉を僕は好きません。それは何ものをも表現しないからです。男、女、という言葉は全く違ったものです。男にとって女という言葉が、女にとって男という言葉がどんなに大きな響きをもっていることでしょう。それは不安でもありますが、同時に大きな安らぎへの予感をもっています。

僕等は知られぬ大きな暗いものへの怖れを感じると同時に、その向こうに何か唯一の故郷の感じ、それだけが生きることのたしかなより所になるかもしれないというような感じをもちます。そしてそれは必ずしも家庭というものへの期待だけではない。もっと深い、逆説的にきこえるかもしれませんが、もっと非人間的なまでに深いある感情なのです。それは世界のもっとも深い流れに通じるものなのです。

あのひとは美しい、あのひとは美しくない、とよく人は云います。しかし本当に美しいものは実はただひとつしかない。容貌や体のどんなに醜いといわれる人でも、それをもつことが出来ます。もしその人たちが、本当に男になることが出来、本当に女になることが出来るならば。そしてそうすることで僕等は始めて人間になることが出来、世界に与ることが出来ます。世界こそ真に美しいただひとつのものなのだ。僕等は常に生命のもっとも深い流れに気づいていなければならない。そして僕等はその中で生きることによって、始めて満ち足りることの不可能でないことに気づくようになります。そのためにこそ、僕等は僕等の性をもっと大切にし、もっと深く感じ、もっと深く考えねばならない。性を無暗に自由に考える考え方も、性を不当に恥じてしまう考え方も、性を大切にしていないという点では同じことです。性をその皮相な現象面でとらえることをやめて、僕等は性のもっと深い意味に、もっと大きな働きに気づき、それに対してもっと謙虚にならなければならない。そうすることで僕等は本来の健康な生命をとりもどすことが出来ます。そしてその時こそ、僕等はあの夏の日

の草や花々や蜂と同じように本当に生きることが出来るのです。性は本来美しいものでもなければ、醜いものでもない。それはもっと僕等の存在自体なのです。それを性と云って切り離して考えることも出来ぬ程、僕等自体である筈です。美しい性、美しくない性などというものはない。僕等は性において平等です。樹々のように僕等はその存在の本質において、世界へのむすびつきにおいて平等なのです。

生活へ

本当の幸福は僕等のそれを意識しない時にあるのではないでしょうか。或いはある意味で、意識しすぎるところから始まります。不惑とはどんな意味でしょうか。僕にはそれはある種の調和の中にいられる状態のように思えます。ところが意識はしばしば調和を破るものに他なりません。僕等は生を常に行為として生きねばならない。決してそれを観念として意識しているだけでは生きていることにはならない。青春とは或る意味で観念の過剰な、そしてそれ故に行為の不足な時期です。若い僕等はしばしば生を夢見るにとどまっている。僕等は夢見るだけでも十分苦しみます。しかし苦しんでいるからと云って、それが本当に生きていることの確証になるとは限らない。僕等はあこがれてばかりいてはいけない。僕等はそれを満たそうと努めねばならない。そして本当に生き始めねばならない。僕はどんなに未完成な一瞬一瞬をも完成された生として生きたいと願う者ですが、生を常により本当の生に近づけよ

うとする努力こそ、それを完成させ得る唯一の途だと思います。その意味で若さはやはりひとつの始まりでもある。それには足りぬものが多いのです。僕等は生活し始めねばならない。僕等は家庭を営み、自分たちの子供をもたねばならない。そして働かねばならない。僕等がそうして本当の生活を生き始める時、僕等はもはや生を夢見なくなり、きっと意識さえしなくなります。そして僕等は自分たちの惑いに惑わされなくなります。僕等はいつかそれを忘れるに違いない。それは決して倦怠や怠惰からではなく、あくまで健康な生活者としてなのです。そのような生活者になることで、僕等は初めて大人になり、初めて惑いのない生への可能性をもつことが出来るのではないでしょうか。

贈物

おまえの長い形のいい頸に
俺は四季を飾りたい
花の色　空の色　雪の色を
おまえの肌のいつまでも喜ぶように

おまえの深く暖い胸に
俺は海を飾りたい
時に暗く　時に輝き
俺は溺れ俺は救われる

おまえの強くしなやかな足首に
俺は風を飾りたい
疾く生き

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com